

---

# 逆襲パラダイス

桜雷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

逆襲パラダイス

### 【Nコード】

N7800Y

### 【作者名】

桜雷

### 【あらすじ】

逆襲パラダイス！

理不尽で自己中な大人をやっつける！

金¥金¥金¥でもううんざりな子供達に告ぐ！

行動に移せば簡単にやっつけられるのさ！

さあ、行こう！自由を求めて！

って、という感じの話です。

## 前書き？

これは、大人たちの理不尽さに限界が近づく君たちにオススメする小説です。

メンバー

主なメンバー

・花園 桜雷 (はなぞの さくら)  
花園家次女、やんちゃというかもう、スケバンみたい。空手・合気道・パルクールなどが得意。

・花園 智桜 (ちひろ)

花園家長男(桜雷の弟)、竜に思いを抱く。

・氏神 竜 (うじがみ りゅう)

氏神家の長女、智桜が好きだけど両思いだとは気付かない。

・氏神 龍 (たつ)

氏神家の長男(竜の双子の弟)、桜雷が大好き(いまだ思いは届かず?)学年一位の成績。

・小野寺 沙綾 (おのでら さあや)

麻美の妹で秀才、龍に恋する乙女

・太田 里奈 (おおた りな)

現役モデル、智桜に恋をしているが、実は学年の秀才とも付き合っている二股女

この中2中1の子供達は、悪知恵を使い大人たちを懲らしめます。

わきキャラメンバー

・坂田 碧衣 (さかた あおい)

でしゃばりなお嬢様、吹雪が好き。

・桜庭 美代 (さくらば みよ)

両親がいない。親戚の家で世話になっているが、基本加奈にべったり

・佐々木 玲羅 (ささき れいら)

the 平凡。それがコンプレックス。

・神谷 奈々 (かみや なな)

桜雷たちに嫉妬(龍に恋する)

・神谷 嬉々 (きき)

奈々とおなじく。(奈々の双子の妹)

さあ、始まり始まり。

「「「退学!?!?!」」」

女子高生達は、悲鳴のような声を上げた。

目の前に立つ校長は、得意げな顔で生徒たちを見下している。

校長の名は、鈴木 啓二。

学園一というほどハゲ。

育毛剤のせいで髪は黒く太くなるばかり。

鳥の産毛のような数少ない毛は、なんとも気色悪い。

それと、悲鳴を上げた女子高生達の紹介をしましょう。

・鈴木 麻里子 (まりこ) 啓二の娘

親の性格の悪さにあきれ、家出、吹雪が好き。

・柴田 砂苗 (しばた さなえ)

麻里子とおなじく、教育ママでシングルマザーな母にあきれ、家出

・小野寺 麻美 (まみ)

沙綾の姉で、秀才。

・桜庭 加奈 (かな)

美代とおなじく、親がいないので、毎日母親代わり

・花園 吹雪 (ふぶき)

桜雷と智桜の兄。バカだけど情が深くて優しい。

・志田 愛 (した らぶ)

名前がコンプレックスのデブス(気付いていない)、吹雪が好き

・曾根崎 心愛（そねざき こころあ）  
お嬢様（自称）、超KY、吹雪に恋する。

メンバーがそろったところで、あらすじ。

大人たちの策略で退学にさせられた女子高校生達を救うべく、女子  
中学生達が立ち上がる！

金で汚れた大人たちをめたためにやつつきたい！さあ立ち上がれ！  
落とし穴から電流から、次々に浮かぶイタズラ、実行せずにはいら  
れない！！

さあ大人たちをハメろ！一泡吹かせて従えろ！

（一部男子）

です！

本編は次回！

マーマレードには鮭フレーク(前書き)

初イタズラ大成功

## マーマレードには鮭フレーク

朝、目が覚めて学校へ行く準備をする。

とちゅう彼女は、何を思ったのか制服を脱ぎ捨て私服へと着替えた。

ああ

そうだった。

鈴木麻里子は、昨日、高校を退学させられたのだ。

でも、いとしの吹雪となら、と考えていたが。

朝食を取っている最中、クラスの仲間の顔が浮かんだ。

パンに塗ったマーマレードがすっぱくて涙が出た。

心の傷を隠すための言い訳かもしれないけど。

いつもより遅くおきた花園吹雪は、母が起こしに来ない事を不思議には感じていなかった。

だって、退学したんだし。

涙はでなかった。

でも、ちよつとだけさみしかった。

クラスの仲間がちよつとだけ、恋しかった。

でも、朝食のいいにおいに、そんな思いもかき消された。

ああ、鮭フレークが食べたくなってきた。

二人は今日、会う約束をしていた。

二人きり、ではないが。

退学になった高校生数人と、振り替え休日で休みの中学生達。

十人以上の人数に少し驚いた。

なぜそんなに集まったかというと、

高校生軍団は、やはり納得いかない！と。

そして中学生軍団（兄弟含む）は、これからの未来が心配だから、道を正しに。

そして、第一にだ。  
何があったかというところ。

キリスト教の学校である「私立夢木高等学校」（ゆめきこうこう）  
夢木なんていうけど、なんてかけらもない学校だ。

主に、パソコンなどを中心とした教養を行っている。

学校長は鈴木啓二。

ハゲ、デブ、イヤミ

最悪な三拍子。

今までも、気に食わない生徒は、親に金をわたして退学にさせてきた。

だが成績優秀者は数少ないため、静かで、活気のない学校だ。

そこに入学してきた吹雪たち。

今すでに高校二年にはなっているが、留年ぎりぎりなのだ。

そしてやらかした。

期末テスト学年底辺組の吹雪たち。

そう。

\*全教科あわせて\*1000点以下。

あはは、どころでない。

で、鈴木に排除されたのだ。

そして吹雪と麻里子と桜庭加奈たちは前科がある。

三人は、一度鈴木を落とし穴にはめた事がある。

秀才のはずの小野寺麻美は、鈴木の子を訴えたことがあると

いう。（これって前科？）

そのほかのみんなも、毎回毎回、「全教科合計1000点以下」。

曾根崎心愛も、毎回懲りないもので、金で物を言わせている。

柴田砂苗は、鈴木麻里子とともにピアス。

志田愛は、ただデブスでkyなだけでなく頭も悪いという。

鈴木の子に食わない奴らは全員排除。

曾根崎は、親が金好きなので問題はないらしく、すんなりと承諾し

たそつだ。

吹雪の親は、今も鈴木をハゲとよび、憎んでいる。

麻里子の親・・・は、鈴木。

志田の両親は、愛になんてこと！って激怒w

小野崎の母は、まあ、いんじゃない？と他の高校に入れようとしている。

柴田の母は・・・特になし。放任主義らしい。

桜庭は、まあ、これからを考えると心配なので反対だそつだ。

吹雪も、こんな校長いない方がいいのだが、この学力でどこに入れるというわけでもない。

そして今回思いついたのが、

「鈴木啓二のよわみをいっぱい握っちゃって、社会的に抹殺しちゃおう！」という計画。

ウワサによれば、エンコーバクチアンパンのほかd vなどの良くない種は山ほどある。

でも、金持ちだから全てもみ消せるというわけだ。

「なあ、麻里子？」

「つえ！？あ、吹雪、何？」

「あのさあ、ハゲってDVやってるってホント？嘘？」

「ホント。私も虐待されてきたから分かってるんだけど、警察が取り扱ってくれなくて。」

「辛かったな、お前も。ナントカしてあのハゲを社会的に抹殺したっ！あ！え！」

ドン、と人にぶつかってしまった瞬間を麻里子を見た。

「すみません！前見てなくっえ！？え！？」

謝ろうとしたら抱きしめられた。

「ええええええ！？ふ、え、吹雪！？え、アンタ誰！？」

抱きしめている方の人間をよく見てみると。

見覚えが。

その人は女性で、とてもスタイルが良くて、ハーフの金髪青目の美

女で、

校長の秘書。

若干、愛人というつわさもがあるが、彼女は「新関にいせきダルシア」というらしい。

彼女は男子生徒好きで、女子には結構きつい。

「えええ！？だ、え！？ダルシア先生！？ツて吹雪イ！気絶してる！？」

「oh、ゴメンなさいね。びっくりしちゃって。」

「え、いえ、先生吹雪はなしてくれませんか？」（びっくりして抱きしめるってなんなのよ）

「あ、吹雪君？ごめんねえ。」

急に猫なで声になるダルシア。

吹雪はお気に入りらしい。

「つへ、え？あ、オレ気絶してた？」

「大丈夫？吹雪君。」

「え、はいまあダイジョブですけど・・・なんで先生ココにいるんですか」

「え？ああ、平日なのにつて事デシヨ。あのね、ハゲがうざいから逃げ出しちゃった」

「！？え！？え！？すっげー！つて、何ですかそれ。ハゲって・・・校長？」

「そうそう！セクハラがウザいから！ウフフ（^ ^\*）吹雪君って可愛いわね！」

そしてまた抱きしめる。

「ダルシア秘書、吹雪とこれから用事があるんですよ、サヨナラ」

「ほほ、棒読み。嫉妬って見苦しい・・・」

「ohそうですか。じゃあね、吹雪君！あ、メアド交換しましょ！」

「え、ああ（・・）はい。」

目の前で赤外線・・・奪いたい。

「吹雪、あの・・・あたしも、交換したい・・・」

「え？ああ、いいよー」

「え！？いいの！？」

よっしやあああ！

そして、ダルシアと分かれた後にみんなと集合。

「碧衣です！私にいい提案があるわ！」

大人の見栄を利用したイタズラだ。

碧衣ちゃんのうちはお金持ちで、レストランを三店舗、副業で営業しているそうだ。

そこはある程度ゆめいなイタリアンレストランで、鈴木がよく来店しているのを見ているらしい。

そこで考えたのが、この作戦。

「テキトーに私達でゲテモノを作って、イタリアン最高級でござい  
ますって食べさせるとか。」

「お！いいじゃんそれ！」

そして考えたメニュー。

・ マーマレード適量

・ 鮭フレーク適量

・ 赤ワイン適量

・ わさび適量

・ 塩コショウたっぷり

・ ポン酢おおよし4杯

・ 白髪ねぎ2本

・ オリーブオイル4杯

・ 豚肉たくさん

を、適当に混ぜる。

豚肉のオリーブオイルナントカカントカ白髪ねぎ添え  
的な。

さあ

作戰開始！

マーマレードには鮭フレーク(2) (前書き)

初イタズラ大成功

## マーマレードには鮭フレーク(2)

マーマレードには鮭フレーク(2)

前書き 初イタズラ大成功

小説本文 鈴木は、4度目の来店ということ

サービスに、特別料理を出すといっておびき寄せた。

『特別料理』というのはもちろん、

『俺達特製！

とりあえずその頭上の無法地帯どうにかしろよ禿デブ教師が！豚肉

&鮭マーマレード酢添え』

(まあ、名付け親はオレ(吹雪)なんだけどね。)

結構高評価なネーミングの割に・・・

グロい・・・

グロすぎる・・・食べられるの？これ・・・って言う料理。

(とりあえず食べられる食材を使ったし、大丈夫だろ、多分。ぐら

いのヤヴァさ。)

まあ、今のこの状況を説明しよう。

みんな大爆笑で調理場の清掃中だ。

そこにいたるまでのお話をしよう。

語りはオレ、今回大活躍の吹雪が担当します。

「鈴木様、いらつしやいませ。」

シェフが大勢で横に並ぶ、豪華なレッドカーペットを一人で歩く禿  
一番奥のテーブルセットに腰掛ける。

「やあ、こんにちは、坂田料理長。今日は楽しみで仕方なかったよ。

」

「ありがとうございます、鈴木様。本日は、特別な超高級料理をこ  
用意いたしました。」

少しの会話を終えて、歩き出す坂田パパ。

調理場へ入ってくるなり、ニヤリとわらってブイサイン。  
作戦開始。

碧衣ちゃんの指示により、メインの前に出すための料理を作る本物のシェフたち。

そして、俺達は作戦にとりかかった。

あと、30分以上余裕があるが・・・

豚肉をカットするのに時間がかかった。

「うっわあ・・・でっけえ。」

5歳児一人くらいある肉の塊に驚く皆。

そりゃ、こんな豚肉見たこと無いし。

それを、丁寧に坂田パパが切り取っていく。

一番軟らかいところを使おうという提案により、ドンドン切り刻まれる豚肉。

そして、その間に下準備。

鮭フレーク

マーマレード

塩

胡椒

オリーブ油

それぞれ、違う大きさを違うラベルのビンを並べた。

そして、中くらいのボウルに

ぶちまける！

まずはマーマレード

次に鮭フレーク、

塩

塩

塩×4回

胡椒×9回（最後一回だけ蓋無しで振っちゃった）

ポン酢大匙・・・5？あれ、6？

オリーブ油大匙何杯だっけ。

ソレを、泡だて器でかき混ぜてかき混ぜて。

鮭フレークは目立つけど、まあ良いやっという感じでなるべく細かく。

ソース完成。

なめてみる勇氣はなかったから、妹の桜雷に味見（毒見）させた。さすがの桜雷も、「うえっ！」っていつて目をつぶった。

その後、しばらくうがいしたあと床に寝転がっていた。

豚肉のカットが終わり、どう焼くか。

赤ワインで焼いた。

これも、坂田パパ担当。

大きく火が上がって、綺麗だった。

いまからあんなソースがかかると思ってもったいなかった。

っていつか焼きあがったら食べたかった。

でも、我慢。

焼きあがった肉からする良い匂いをかぎつつ、サラダを作ることにした。

白髪ねぎサラダ。

クソまずそうなものに仕上がるに違いない。

まず、白髪ねぎを千切りにしたりして、ボウルにあける。

そこで登場。

また、ポン酢。

次に塩。

次、胡椒。

次、わさび。

次、あのソース改改版少量（鮭フレーク無し）

という具合のものを混ぜて、ねぎに絡める。

できあがり。

みためは・・・まあ、見れなくは無い。

さあ、出来上がり。

俺達特製なんかかかんとか。

わすれちゃった。  
を、出す。

「メインでございます。」

坂田パパ、笑いをこらえて料理を出す。

あんなにひどい見た目ののに、全く驚かない鈴木。

「ああ、これは、アレじゃないですか？あの、あれ。」

「え、ええ！ええ！そうなんですよ！あのー・・・あ、あれです！  
通ですねえ！！」

「でしょう！私、こう見えて結構通なんですよ！」

冷や汗坂田パパ。

ナイス切り抜け。

つてか、鈴木キモいんだよ！

通ぶってんじゃねえよ！うぜえ！

あれってなんだよ！

そして。

ナイフとフォークで豚肉をカット。

迷いもなくソースを絡め、口へ運ぶ。

「・・・」

しばらくの間、目を瞑っていたが・・・

「・・・っげほっ、お、いしい、すね、これ・・・」

あ。はきそうな顔（笑）

うけるわ（爆笑）

「お気に召していただけましたか？」

「ええ。もちろん！あ、ああ、じゃあ、サラダの方を・・・」

キターーーー！！！！

はいてしまえ！

皆様の前で羞恥をさらせ！

つてかその前にもうその頭上焼け野原こそ生き恥だけどな！

白髪ねぎを、口に運ぶ動作に違和感があった。

・・・気付いたか？

だが、ためらいながらも口に入れた。  
ねぎサラダの味見は坂田パパがした。

沈黙して、うがいをした後にそのまま運んだ。

そして、鈴木はソレを飲み下して。

「・・・」

沈黙。

・・・白目むいてねえか？

いや、大丈夫だろ。多分。

マーメイドの風味が・・・とかいえないもんな！

通（自称）だもんなあ！

そして。

「・・・うえ・・・」

小さい嗚咽が聞こえた。

「鈴木様？」

「ついや！ああ！美味しくて涙が！」

もう、厨房ではみんな大爆笑。

坂田パパは、あのクールな顔のウラでは必死に笑をこらえているだろう。

そして。

シメのデザート。

これは、怪しまれないように本物のシェフが作る。

でも。

ちよつとだけ遊んでみた。

とても美味しそうなラズベリーソースケーキに

よくつぶしたマーメイドをかけた。

シェフは、気付かぬままそれを鈴木の元へ差し出す。

「本日最後の、デザートで（・・・ん？・・・）ございます。」

出してから気付くシェフ。

やたらとソースのかかったケーキ。

不思議がることもなく、ケーキを平らげた鈴木は、満足そうに勘定

をして帰っていった。

そして、今に至る。

次のイタズラは何にしよう。

ヌーマレードには鮭フレーク(2) (後書き)

次回の語りは桜雷担当です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7800y/>

---

逆襲パラダイス

2011年12月11日20時47分発行